

「ローマ教皇、動く」

主任司祭 晴佐久昌英

このたび NHK にて放映された NHK スペシャル「ローマ教皇、動く “イラク戦争とバチカン外交”」(04年6月20日放映)は、近来まれに見る出色の出来だった。カトリック教会の真髄を明晰かつ感動的に紹介するその内容もさることながら、このような作品を NHK が日曜夜に全国放送したことの意義は計り知れない。平和のために働くカトリック教会の姿を見て、どれほど多くの人がキリスト教に関心を持ったことだろう。これは日本の教会にとって、ひとつの事件だと言ってもいい。

内容は、「神のご加護のあらんことを」と言いながら戦争を始めようとするアメリカのブッシュ大統領と「アッラーの名のもとに」徹底抗戦を呼びかけるフセイン大統領の間に、「神の名において殺すなかれ」と教皇ヨハネ・パウロ2世が介入していくプロセスを追ったもの。実際には開戦を阻止することはできなかったものの、真の平和を生み出すのは強大な軍事パワーではなく、許しと対話という福音的なパワーでしかありえないことが、戦争回避のために各方面と忍耐強く交渉し、必死の調整を試みるバチカンの働きを通して描かれている。

誰だって世界の平和を願っている。暴力の連鎖を断つために何かしたいと思っている。しかし皆、おびただしく流される血と涙を前に立ちすくみ、絶望しかけている。そんな中、教皇が動く。教会がただ祈るだけでなく、現実の世界に命がけで関わる存在であることを世に示すために。病のために震える体で、戦争という悪霊に真正面から立ち向かう教皇の映像を目の当たりにすると、熱いものが込み上げてくる。

カトリック高円寺教会も動こうではないか。教皇自らが動いているのに、信者が動かないで何のカトリックか。全世界11億人のカトリック信者が本気で動けば、必ず世界は変わる。動けば仲間も増え、仲間が増えればさらに変わる。今の時代を救うことができるのは、このカトリックにおいて他にない。たぶん真の敵は、「悪には勝てない、動いても無駄だ」という恐れとあきらめなのだ。信念で動く教皇の姿は、「カトリックという希望」のシンボルなのである。